

勤続 35 周年を振り返って

長いようで短い 35 年間でした。特に、最後の 1 年間は 1 週間が 4 日で終わるような感覚で時間が経過し、あっという間に定年退職を迎えました。この間、パーキンソン病を発症するなど辛く耐えがたい日々の連続でしたが、学科の同僚、テニスの仲間、研究室の学生と OB をはじめ多くの方からご支援を頂き、無事退職をすることができました。

九州大学大学院工学研究科土木工学専攻に入学したとき、人に密接にかかわる都市計画や交通計画の分野の研究をしたいと考えるようになりました。しかし、専門を変えることがいかに無謀で、大変かということとその後いやというほど思い知らされました。各研究分野の分析もせず、思い込みだけで物事を決定する危うさを身に沁みて感じました。母に『ドクターに入ったら都市の計画をするよ』と言ったら、『自分の計画もできなくせに、何が都市の計画ね』と予期せぬ言葉で夢から覚めたような気がしました。計画分野に変更すると公言していたので後戻りもできず、前に進むしか道はありませんでした。計画部門で頑張ろうと指導教官の内田一郎先生に相談に行ったら、開口一番言われたのは、『清田君、研究は一人ですものだよ』でした。ドクターになったら人に頼ってはいけない、自分で適当なテーマを見つけて学位論文を書きなさいと言うことかと思ひ、何を研究するかというテーマ探しから一人で始めなければなりません。しかし、計画に関しては素人で、相談する人もいないし何の蓄積もないので、とりあえず計画を本格的に進めていくうえで重要になると思われる統計・確率や数量化理論などの分析手法を勉強しました。しかし、研究テーマが定まらず 1 年が過ぎてしまいました。非常につらい日々でした。もう研究を辞めようかと何度も思いました。このままでは潰れてしまうと考え、意を決して交通工学および交通計画の第一人者である高田先生を訪ね、ご指導をお願いし、毎週 1 回のゼミに参加することを許していただきました。早速次の週から、週 1 回のペースで福岡から佐賀まで行って、ゼミに参加し、先生のお話を聞いたり、技官だった田上君と研究の話をして夜遅くあるいは一泊して帰宅する生活が 4 年間（九大のドクターコース 2 年間および福岡建設専門学校 2 年間）続きました。徐々に、研究分野が交通計画と都市計画を統合した土地利用交通モデルや最適化手法を用いて交通施設整備計画を立案する手法の開発に絞られてきました。助手になって三年目、ようやく土木計画学研究論文集と都市計画論文集に掲載されるようになりました。この二つの論文と約 1 年後に掲載された論文をまとめて平成元年九州大学から工学博士を取得しました（題目：地方都市における道路網整備計画手法に関する研究）。

これですべて上手く行くと思っていましたが、逆境の期間が長かったために研究に対する考え方や姿勢が歪んでしまったようです。いつのまにか論文を書くことが目的

になっていました。深く掘り下げて考えずに次の研究に移るので、独創性に欠けるレベルの低い論文になっていることに気づき愕然としました。もう一度原点に戻って、現在取り組んでいるテーマを再検討し、佐賀市に相応しい自転車道路網はどうあるべきか、佐賀県が始めたパーキングパーミット制度をより有効にするためにはどのような改善が必要かなどを提案していくことが重要であると考えようになりました。これこそが私のできる地域貢献だと思います。気持ちを切り替えたら、研究が楽しくなると同時に論文も今まで以上に書けるようになりました。

35年間の研究論文（審査付論文）履歴をまとめると図-1のようになりました。年齢によって論文数、特に自分が主体になって研究した論文の数が違うことがわかります。還暦を迎えてからの5年間の論文数が7編で、自分が主体になって研究した論文数は6編です。諦めずに継続すれば、60歳を超えてもまだやれるということを示しています。現在65歳で、あと3年間は研究を続けられそうな気がします。私が現在最も熱心に取り組んでいる新しい設計コンセプトに基づく新パーキングパーミット（New PP）制度の資料を参考資料としてホームページに載せてもらうことにしました。New PP制度は、広くて安全な停車帯を主要な出入りに整備するとともに乗降部をうまく活用することによって、障害者間の軋轢をなくし、健常者の不正駐車を防止する方法です。従来の基準では一般車用駐車区画100台に対して3.5m以上の障害者用駐車スペースを2台分整備することが義務づけられています。我々が提案する方法を採用すると一般車用駐車区画を2%（100スペースのうち2スペース）犠牲にすることになりますが、30台分の障害者用駐車スペース（3.5mの広いスペース（WP）：2台分、2.75mの狭いスペース（NP）：28台分）を確保することができます。ここで提案している方法はユニバーサル社会に向けた一つの取組み（挑戦）だと考えています。是非、卒業生の皆さん、障害者用駐車場整備計画案等を作成する場合には、新しい設計コンセプトに基づいたNew PP制度の導入を先進的事例として検討していただくようお願いいたします。

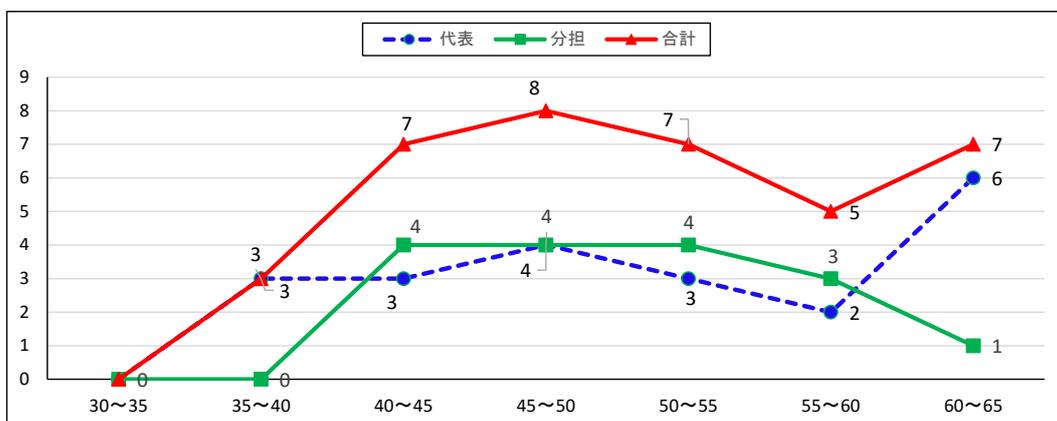


図-1 年齢と論文の数